

私にも 言わせて! 第162回

公衆衛生医師という仕事の、 幾つもの視点



広島県健康福祉局
医療機能強化推進課
高橋 一剛

広島県庄原市(旧比婆郡西城町)出身。平成23年岡山大学医学部卒業。広島市立広島市民病院、庄原赤十字病院で外科医として研鑽を積み、母校の消化器外科学教室にて博士課程を修了。令和4年度に岡山県に入職し、岡山県内のクラスター対策等に従事。令和5年度より現職。消化器外科専門医。

地域医療に関心があり、臨床医の頃から地域医療の仕組みの重要性を肌で感じておりました。公衆衛生医師へのキャリアアチェンジから4年。毎日が勉強と感じる日々が、日々感じる感謝しながら、この4年間で振り返ってみました。

公衆衛生医師と「仕事の「視点」」

公衆衛生医師として働くようになってから、私はこの仕事には幾つもの「視点」があるのだと感じるようになりまして。①医師としての経験や知識から考える視点、②公務員として行政の観点から考える視点、そして時には③データを通して地域の医療を考える研究者的な視点です。これらの視点は立場や場面によって少しずつ比重が変わりますが、これらの視点を行き来しながら、時にはさまざまな割合でブレンドさせながら、地域の医

療や住民の皆さんの健康を考えていくことが、この仕事の大きな特徴であり、面白さでもあるように思います。

行政の職場で気付いた「もう一つの視点」

令和4年度、私は岡山県庁の新型コロナウイルス感染症対策室で公衆衛生医師のスタートを切りました。着任時、周囲の方々からは「高橋先生」と呼ばれていました。医療の世界ではごく自然なことですが、行政の職場では自分だけ特別扱いを受けているようで、どこか不思議な感覚でもありました。

臨床の現場に戻ると見えてくるもの

現在、月に1度ではありませんが、二次救急病院で24時間の当直業務も担当させていただいております。この時には、完全に「現場の医師」としての視点に戻り、いつも懐かしく感じています。時々、臨床の現場に立つと、以前の病院勤務の際には気付かなかったことが際立って見えてくる場合があります。なぜこの患者さんは遠方から救急搬送されてきたのだろうか。地域の医療体制の中で、どのような経緯でこの病院にたどり着いたのだろうか。また、高齢の患者さんに対する救命処置の在り方についても、在宅医療・介護施設の体制やご家族の思いなど、さまざまな要素が関わっていることを、以前にも増して意識するようになりました。救急隊員の方や看護師さん、ご家族との短い会話の中から、地域医療の実情が垣間見えることも少なくありません。こうしたミクロな現場の気付きは、行政の仕事をしているだけでは得られない貴重な視点であり、地域医療を考える上で

大切な手掛かりになると感じています。

データから地域医療を考える

一方で、行政の立場では地域全体を俯瞰するマクロな視点も欠かせません。日々の業務の中で感じる疑問をデータから考えてみたいと考えようになり、地域の医療データの分析・公開にも個人的に取り組みようになりました。将来的な人口構造の変化は地域によって大きく異なり、都市部から中山間地域、島しょ部まで多様な地域を抱える広島県では、将来の医療需要も地域ごとに大きく変わってきます。人口動態という比較的シンプルな指標からでも、地域医療の将来像について多くの示唆が得られることに気付きました。これまで自分自身が広島県と岡山県の都市部や中山間地域で外科医として働いてきた経験もあり、自分の肌感覚や思い込みと実際のデータを照らし合わせてみると、新しい発見や小さな感動に出合うことも少なくありません。こうした発見を地域の関係者と共有し、地域医療の議論に少しでも役立てていくこと

公務員としての「視点」を意識し始めたのは、この出来事の後からだったように思います。

医療と行政の言葉の間で

現在私は、地元の広島県庁で病院統合に関わるプロジェクトに携わっています。外科医として約11年間、臨床の現場に身を置いておりましたが、医療の現場は患者さんや医療スタッフと接する中で、肌感覚で物事を理解していく場面が多かったように思います。手術室に張り詰める独特の空気や救急外来の慌ただしさ、そして患者さんやご家族と向き合う日々に対応するためには、現場での肌感覚が非常に重要であると、今でもそう思っています。

一方で、行政では言葉や仕組みが社会を動かす重要な道具になります。政策に関連する文書や会議

ができればと考えたりしています。

また、この取り組みについては、岡山県真庭保健所長の宮原勅治先生にご指導をいただいております。岡山県での勤務はわずか1年ではありましたが、多くの方々とのご縁をいただき、今でもお声掛けいただいていることに心から感謝しています。公衆衛生の世界では、お世話になった方々とのご縁の中で学ぶことが本場に多いと感じています。

公衆衛生医師として働く中で、私は医師としての視点、公務員としての視点、そしてデータから地域医療を眺める研究者としての視点を、自然と行き来するようになりました。こうした幾つもの視点を持つことで、地域の医療はより立体的に見えてくるように思います。これからもさまざまな現場に足を運び、多くの方々との対話を重ねながら、公衆衛生医師として地域の健康を支える「視点」を少しずつ深めていきたいと思っています。

■参考資料
Tableau public, Kazutaka Takahashi, M.D., Ph.D.
<https://public.tableau.com/app/profile/kazutaka.takahashi/vizzes>

